蕉門

俳諧一枚起請

許六

027
289
1

一枚起請

黄門の手跡日ニ夜ニ減し此上ハ年此
事ニ成り世と共のミんなよろしく
候ゆゑ是病裏日ニ夜ニ下り申候
乃日数ハなし後代は起請文を枕とし
発明器用の人々師匠よろしく流義も
行つ毎し一流ハ初ニ立事代ふつ代
習ひして写よ筆世ニ出けれ今
此殊起門人皆是をつけすゝめ此人よ

027
289
1
愛知女專
第 11393 號
圖書
11392

十人あまりなれハ十人のロりなくふ
ハりを以く芭蕉流と決定さん必
世事代未代よりてもあるべ蕉翁の
名にはるといふハ色也雅くあること
なれ作者流派しるさるの大変
といふハ正風神を宗とするあり色
見光るる所を自作とし古きとして
多西印ろしたるゆへよ蕉翁
のさしおきをうけて人の感ずるを
をすると田家九情をいとゝ白小麦

を入まてるハ常也芋を入れるといふり
さし細ゝ麦矛二ふり多合といふこと安
流の服ことの宗匠達一人も志ろに
ゆりけ合とよく知る人ハ日く歩く行
先くに数白ハ行ると者小志ろる
有よ能さ数白も拾とたるの小数白
なりさるくるり世先作つよ
るしのもとの事合といふハ花よ
あとなるふの本をうけ合し名月
ハ三井ちの門和く事をう事合する

なりその中へ取合をふさ接ふつさ
め代合て発るにさるゝ也季と季
との辞をとり合するも同前名人
の作也

青柳の泥にしたるゝ汐干哉

汐干に青柳のとり合これ名人の作也
古しといへハ古し新しきといへハ是よ
り新しき物ハなし泥ハひすひかし
て継目也一句を取合るを見て両
何さ物を継合する也先師の句一句

かくもの名人の句ハ凡才三昧に
動くの動のあとにつきくなれ動より
薬師の也玄風の陽端よ神さ野菊の
撰めに動くといふその位をさまと
動し決定のことかはり爾能業哉
活見句作るそのく文当流小洮諸の
読ることいふこと一大事也歴くの門
人是代去に一大事の取合のとみて
うさの読ることいふはかのゝり座ゑん
ことならさ守仙生れ作られは讀にく代知

らるれハ人の奇の長恵りてと自秋
字面くゝそ讀あてくもはれ為り
のゝ仏ゝ也結ると長ふ云いゝゆは
相長有へくれとゝいのゝうゝ為も見
かう消分ゝらゝるまゝるゝ讀あ
ゝハとゝ迎一ゝ稲なゝ来ハ上ゝの白
よなゝ一ゝゝれ人ハ物のゝゝゝ如ゝゝる
ゝゝ紙上ゝゝゝ世讀ゝゝ十や百
ゝひても初ゝゝゝ相ゝ涙の新ゝ袖
ゝてのゝゝひ迎第四小連雅ハ春長

の辞を歌ゝゝ秋の春ゝ春ゝ秋ゝ
ゝも春ゝ小ゝれゝゝゝ物ゝ秋の
岸長ゝ山のゝゝひ似ゝ事ゝて長乃
野秋の野ハ影迎先仰大根引ゝ影ゝ
なゝゝゝゝ大根ゝゝゝ事ゝゝ春ゝ
ようゝて出ゝれゝう一生ゝ秀迎の
歌を撰ゝ梅横月富ゝゝゝひゝん
情へゝ第ゝゝ当流ゝて義ゝ
人知かくゝゝ来ゝ奇迎清ゝれ
ゝ代宗ゝゝれゝ雅儲ゝ

[illegible]の[illegible]にて[illegible]に云
紫つくりを切ぬきたいらめてとりあ
なりくれて行末の別はまことの[illegible]切
の末のあらたいらい也有ひあるりく
後に雨雨とふはたらいこ書は[illegible]
たなりれとまん所ふつあれ辞はみな
さいらいなりを年侍後の人のてりた
切家なりの後の沙法の法とりく侍後
して色をすもしたの後の仕相をお
海りく初ていらいの後をあさて古今

小海るこのはえき并一人こ恵門人のりふ
後の仕相をよく初りてとるるのは其角
一人也されと後をめるる友に死るあ
りはいつ恵事をいひ出るり石翁の俳
諧ととるこは大こふ古くしてなめ
後の名の多い中あ人の相るこ後は
こあくよりたるいひしるこも富中と
とるへ

干時正徳弟五乙未の秋八月十四日

こ夜病床小物のく識之

辭世

一時に打破る尿糞壺
芳々たる臭気供に焚し火
下もはけうの死の事そと思ひしに
上もも死終はくやと上もなうの

菊阿仲未敗出

追加

菜の花の中に城なり郡山　彦根　許六

じもの大和紀行の中小さて郡山要地四
方郊野の富を形容して治城の景を觀
るうつくしきふ有様の面もそなはる

宝引小夜を寢ぬ敷の賦式　李由
縄簾梟て夜ふかしの巾着　木等
犢梟禪を聞ふくもむや衣笠初　没村
七里米来る紙菜名れ出の声　孟亭

山伏の貝すくも一や生鬼毫、朱迪
夜雪ふる筆やう素や花雲、陀雪
元弘もとやむりーも帰鶏、治天
乳母だの仮のうんくや夕涼、毛氏
えうりのよれ垂る柳ふ、都山蓬井
新雪や呼へ乗出て舟る海ち、吋雪
奇らくの新ハおりーき蛙ふ、宋之
初ノの横ホワくりや野田の梅、梅窓
大原女のくーや新もる机、梅宇
を梅ふるまを賢るの粽人菓、雲伯

梅園

寛延二年
巳巳三月日

佛語書房 心斎橋南久宝寺町 河内屋八兵衛

番號 21
書名 一枚起請 一
箱號 ホナオ
賣價 60

蕉門

俳諧一枚起請

許六